# ならずもの

グリム　Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫

オンドリがメンドリにいいました。
「もうクルミがうれる時期になったよ。どうだい、いっしょに山へいって、思いきり食べてこようじゃないか。まごまごしていると、リスのやつにみんなもっていかれちまうからね。」
「けっこうね。」
と、メンドリがこたえました。
「いきましょうよ。ふたりでたのしんできましょうね。」
そこで、ふたりはいっしょに山へでかけました。とてもいいお天気でしたので、ふたりは夕がたまで山にいました。
ところがですよ、ふたりがあんまり腹いっぱい食べすぎたせいか、それとも、高慢ちきになってしまったためか、そのへんのところはよくわかりませんけど、とにかく、ふたりとも歩いてかえるのがいやになってしまったのです。
そこで、オンドリがクルミのからで小さな車をこしらえることになりました。車ができあがりますと、メンドリはそのなかにすわりこんで、オンドリにむかっていいました。
「おまえさん、車のまえにいって、馬がわりにひっぱったらどうなのよ。」
「ふん、ありがたいこった。」
と、オンドリがいいました。
「馬のかわりをするくらいなら、歩いてかえるほうがよっぽどいいや。いやなこった、それじゃ、まるで話がちがうもの。御者になって、御者台にすわるんならべつだけど、じぶんでひっぱるなんてのはごめんだぜ。」
こんなふうに、ふたりがいいあらそっているところへ、カモがガアガアなきながらやってきました。
「やい、どろぼうども。だれがきさまたちに、おれさまのクルミ山へはいれっていったんだ。待ってろ。いまひどいめにあわしてやるからな。」
こういうがはやいか、カモはくちばしを大きくあけて、オンドリにつっかかっていきました。けれども、オンドリもまけてはいません。すばやく、カモのからだの上にぐんとのしかかって、そのあげく、けづめでカモをむちゃくちゃにひっかいたものですから、とうとうカモもこうさんしてしまいました。ですから、その罰として、カモは車のまえにつながれて、車をひっぱることを承知させられました。
そこで、オンドリは御者台にすわって、御者になりすましました。さてそれから、オンドリはものすごいいきおいで、車をすっとばしていきました。
「カモ公、力いっぱい走るんだぞ。」
こうして、しばらく走っていきますと、歩いているふたりのものにであいました。それはとめ針とぬい針でした。ふたりは、
「待ってくれえ、待ってくれえ。」
と、どなりました。そして、
「もうすぐくらくなるだろう。そうすると、ぼくたちにはひと足も歩けないし、それに道もとってもきたないんだ。ほんのすみっこでけっこうだから、車にのせてはもらえないかい。じつは、ふたりとも町の門のまえの仕立屋の宿にいたんだけど、ビールをのんでいて、おそくなっちまったんだよ。」

と、いいました。

　このやせこけたひとたちなら、たいして場所もとりません。で、オンドリはふたりをのせてやりました。もっとも、そのまえに、ふたりとも、オンドリとメンドリの足をふまないという約束をさせられましたがね。

　夜おそくなって、みんなは、とある宿屋につきました。今夜はもうこれいじょうさきへいく気はありませんし、それに、カモの足つきもあぶなくなって、あっちへよろよろ、こっちへよろよろするありさまでしたから、みんなはここにとまることにしました。

　宿屋の主人は、さいしょのうちは、

「てまえどもは、もういっぱいでして。」

などといって、ことわろうとしました。それに、このれんちゅうが、たいしたお客ではなさそうにも思われたのです。けれども、そのうちにみんなが、

「くるとちゅうで、メンドリさんがたまごをうんだんだけど、そのたまごをあげますよ。」

「このカモは、まい日ひとつずつたまごをうむんですが、このカモもさしあげましょう。」

などと、さかんにうまいことをならべたてたものですから、とうとうしまいには、主人も、

「それじゃ、今夜はおとまりなさい。」

と、いいました。

　そこで、みんなはどんどんごちそうをはこばせて、大さわぎをしました。

　あくる朝はやく、夜のあけがた、まだみんながぐっすりねむっているうちに、オンドリはメンドリをおこしました。そして、まずたまごをとりだして、からをつついて穴をあけ、その中身をふたりですっかりのんでしまいました。それから、からはかまどの上にほうりあげておきました。

　つぎに、ふたりは、まだねむっているぬい針のところへいって、その頭をつまんで、主人のいすのクッションにつきさしました。それから、とめ針のほうは、主人の手ぬぐいにさしておきました。こうしておいて、あとはどうにでもなれとばかり、ふたりは野原をとぶようにしてにげていってしまいました。

　カモは野天でねるほうがすきだったものですから、庭でねむっていたのですが、ニワトリたちがバタバタにげていく音に目をさましました。そして、すぐに小川を見つけて、川下へおよいでいきました。そのほうが、車なんかをひっぱるよりもずっとはやくいけました。

　それから二、三時間たったとき、宿屋の主人はようやく羽根ぶとんからおきだして、顔をあらいました。さて、手ぬぐいで顔をふこうとしますと、とめ針がすうっと顔をこすって、おかげで右の耳から左の耳まで、赤いミミズばれができてしまいました。それから、こんどは、台所へいって、タバコのパイプに火をつけようと思いました。それでかまどのそばまできますと、たまごのからがパチンとはねて、目のなかにとびこみました。

「けさは、いやに顔にたたるな。」

　主人はこういって、むしゃくしゃして大きな安楽いすにこしをおろしました。ところがこしをおろしたとたん、いきなりとびあがって、

「ううん、いたい。」

と、さけびました。

こんどは、ぬい針が、さっきよりももっとひどく、おまけに頭でないところを、つきさしたのです。

主人はかんかんにおこって、ゆうべあんなにおそくきたお客たちがあやしいぞ、と思いました。そこで、すぐさま立っていって、さがしてみました。ところが、そのお客たちは、みんなもうでかけてしまったあとだったのです。

そこで、主人は、ああいうならずものは、もうこれからは、けっしてとめてはやらないぞ、と、かたく心に思ったのでした。なにしろ、あいつらときたら、さんざん飲み食いしたあげく、一文もはらわず、おまけにそのお礼として、とんでもないいたずらをやらかすんですからね。

# 青空文庫情報

底本：「グリム童話集（1）」偕成社文庫、偕成社
1980（昭和55）年6月1刷
2009（平成21）年6月49刷
入力：sogo
校正：チエコ
2019年12月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ならずもの

グリム　Grimm

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

著者　　矢崎源九郎訳
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/